

児童書に見られる直示動詞 「行く」「来る」と言語習得

— 頻度における一考察 —

高梨美穂

Miho TAKANASHI

In this paper, we examined the deictic verbs “iku” and “kuru” appeared in ten children’s books from the perspective of language acquisition. Usage-based approach in the field of cognitive linguistics is adopted to analyze the data. We analyzed the data from the aspects of forms and meanings of “iku” and “kuru”.

The result reveals the tendency that the auxiliary verbs “iku” and “kuru” are used more often than the main verbs “iku” and “kuru”. Especially the tendency is remarkable in “kuru”. In terms of meaning, it is found that “iku” and “kuru” means spatial movement is remarkably used in the children’s books than those of time movement and metaphorical meanings.

From this analysis, it is suggested that it might take some time for children to be able to use “iku” and “kuru” as same as adult native speakers, because of the lack of the total amount of “iku” and “kuru” that shows time movement in children’s daily life.

はじめに

一般的に幼児は、就学までに産出語彙は約 2500 語、理解語彙は約 6000~8000 語身につけ、基本的な文法規則を獲得しているといわれている。では、どのようなプロセスを経て獲得するのか。

usage-based approach (Tomasello 2003) の枠組みでは、子どもは実際の言語使用と経験に伴って言語習得が進んでいくと考える。実際の言語使用環境は、特に低年齢時は主に母親などの養育者とのインタラクションを通して母語のインプットを受ける。その中で、遊びの要素は大きく、絵本を通じての遊びも多く観察されている(高梨 2019)。子どもは乳児の頃から絵本などの読み物に触れて育つ。養育者らによる子どもへの読み聞かせや、子ども自らによる読書など、読み物は子どもに言葉に触れる機会を与え、言語習得に大きな影響を与える媒体であると考えられる。

比較的早い段階に発話が見られる動詞に「行く」「来る」があるが(綿貫 1978, 前田・前田 1996)、直示動詞という側面から、完全に習得するには時間がかかるといわれている(正高 1999, Takanashi 2019ab)。習得完成に時間がかかる別の要因としては、インプットの語彙の意味が限られていることが指摘されている(高梨 2019)。このように基本語彙であるが完全習得まで時間がかかる語彙は、養育者との生活や遊びなどの様々な環境下でこれらの語彙に触れ、使用法を身につけていく。このことから、読み物を通じての学習の力も一定程度働いていると考えられる。養育者との会話など、話し言葉を分析対象にした研究はあるが、子どもが読み聞かせとして耳にしたり、自分で読んだりする、書き言葉を分析対象とした研究は、管見の限り見られない。

そこで、本研究は、インプット経験のひとつとして、児童書が子どもの言語発達にどのように関係しているかを紐解くための嚆矢となることを目指す。具体的には、一般的に児童書には「行く」「来る」のような語彙はどのように現れて、こういった特徴が見られるのか、言語習得との関係性はどうかを明らかにする。

以上を鑑み、本稿では、児童文学に見られる「行く」「来る」の本動詞および補助動詞を、認知言語学的枠組みから調査、分析する。言語習得やテキスト分析に関する先行研究と本分析結果を比較することによって、インプットがどのように言語習得に影響しているかについても考察する。

1. 理論的枠組みと先行研究

本研究では、認知言語学を理論的枠組みとする。本章では、本研究に必要な認知言語学理論を説明し、先行研究を提示する。

1-1. 認知言語学と usage-based approach

認知言語学では、人間の認識の仕方が言語の文法的な振舞いや意味にどのように影響を与えているかを扱う。人間は、五感を通して世界を認識し、捉えたものを言語化するため、言語には、人間が世界をどう捉えているかが様々な形で反映される。認知言語学を背景にした言語習得研究としては、特に usage-based approach が注目されている (Langacker 1988, Tomasello 2003)。

Usage-based approach は、構文文法 (Construction Grammar) および認知言語学の流れを引いており、チョムスキーらによる生成文法の UG アプローチ、いわゆる普遍文法理論に反して提案された。Langacker (1988) は、生成文法理論と対立するものとして認知文法を取り上げている。

生成文法理論は「極小主義的 (minimalist)」で「還元主義的」で「トップダウン的」な性格であるのに対し、認知文法は「極大主義的 (maximalist)」で「非還元主義的」で「ボトムアップ的」な性質を持つ。生成文法理論では、言語習得において話者が学習して心的に表象しなければならない部分をできる限り少なくしようとしており、最良の文法は最小の記号からなるという考え方を採用している。また、刺激の貧困論やプラトンの問題に対しては、普遍文法 (Universal Grammar) という人間が生得的に備えている能力があるという考えを主張し、学習経験の役割を最小限にしか認めてこなかった。

これに対し、認知言語学では言語習得には膨大な量の学習が必要であることを認めている。現実には子どもは言語習得の初期段階から豊富な言語情報をインプットとして与えられており、生後7カ月までには約600万語、3歳までには1,000万から3,000万語を耳にするともいわれている (Li and Shirai 2000)。また、言語だけに特有な生得的な構造を仮定することをできる限り少なくすることを試みている。言語構造をできる限り知覚、記憶、カテゴリー化などの一般的な認知能力から引き出し、言語固有の生得的な構造を仮定することは最終手段とする。さらに言語特有の生得的な構造も、より一般的な能力から分化した適応形式であって一般的能力から完全に分離した独自のものではないと捉えている。

このように usage-based approach においても、言語のみの生得的な構造の仮定を最小にし、言語習得には知覚、記憶、カテゴリー化などの一般的な認知能力が言語習得を促していると考えられる。

Tomasello (2003) はこの理論を言語習得に応用し、言語習得における重要なスキルは、意図獲得という社会的認知能力と、パターン発見という一般的な認知能力であると述べている。子どもは、他者の伝達意図を理解できるようになった後、今度はその理解を駆使して、ことばの産出を学ぶ必要がある。子どもは大人が自分に対してことばを使うのと同じように、大人に対し

てことばを使うことを試す。大人と役割を交代し、大人に向かって大人が行っていることと同じように、ことばを使うことを模倣する。これが役割反転模倣の文化学習である。この学習により、子どもは自分が意図することを、ことばを使って大人に伝達できるようになるのである。これらの過程を経て、子どもはことばを習得する。

1-2. Usage-based approach によるインプットと頻度

次に、usage-based approach における頻度 (frequency) の重要性について述べる。usage-based approach では、言語習得が主に使用と経験に依存すると仮定されているため、インプットの頻度がことばの産出に重要な影響を与えると考える。ある表現の頻度が高ければ高いほど、定着度が高くなり、チャンクを一つの役割をなす処理ユニットとして記憶の中に蓄えられることになる (Kemmer & Barlow 2000)。

この頻度の概念は「トークン頻度 (Token frequency)」と「タイプ頻度 (Type frequency)」の2つからなる。トークン頻度はテキスト頻度とも呼ばれ、問題となる表現が何度並記したか、具体的に一つ一つ数えることで得られる頻度である。タイプ頻度とは辞書頻度とも呼ばれ、ここの具体的表現を一つ一つ数えるのではなく、どれだけ異なった種類の表現が出てきたかを数える (早瀬 2005)。

また、Tomasello (2003) はトークン頻度とタイプ頻度について次のように述べる。

In general, in usage-based models the token frequency of an expression in the language learner's experience tends to entrench that expression in terms of the concrete words and morphemes involved... However, the type frequency of a class of expressions... determines the abstractness or schematicity of the resulting construction- which mainly... underlies the creative possibilities, or productivity, of the construction.

(Tomasello, 2003: 106-107)

言語習得は、インプット情報を手掛かりにして、アイテム・ベースな獲得スタイルからパターンを発見するという認知プロセスを経る。そして、品詞としての名詞・動詞のように言語に特有な抽象的カテゴリーを発展させ、言語習得が進んでいく。この際、頻度の影響を考慮することは重要だと考えるのである。

1-3. 空間と時間の概念形成

空間と時間の概念形成は、usage-based approach のとおり、生活と密着している。筒井 (1994) は時間の概念形成には時間がかかり、成人と等しくなるのは11歳程度だとし、次のよう

に概念を形成すると述べる。新生児には時間は存在せず、家族の中での関係がわかり始めるのが生後6カ月頃からである。このころから人、一人二人という人間関係ができ始めることによって、身体言語(身振言語)が形成される。2~3歳頃に行動的に思考できるようになり、朝起きて、顔を洗って、ごはんを食べて、遊びに行き、帰って寝るといった行動的な順序としての時間概念が身についていく。ただし、時計が少し読めるようになったり、カレンダーが少し使えるようになったりするのは4歳以上である。この頃は一定の音声言語が身につく、文字言語も興味をもって覚え始める時期である。3歳頃から音声言語を使って考えることができるようになるが、黙って頭の中で音声を使って考えられるようになるのは7歳位からである。ただし、この時期でも時計が止まっても時間は動いているというような実在論的時間把握はまだできない。具体物を目の前にしなくとも思考して行けるようになり始めるのは9歳頃からであり、やっと11歳頃に成人と変わらない時間概念を持つようになる。

1-4. 児童書と言語習得

物語文は、子どもが非常に小さいときから触れる言語使用の一つである。子どもは乳児の頃から絵本などの読み物に触れて育つ。usage-based approach (Tomasello 2003) の枠組みでは、子どもは、実際の言語使用と経験に伴って言語習得が進んでいくと考えるため、養育者らによる子どもへの読み聞かせや、子ども自らによる読書など、読み物は子どもに言葉に触れる機会を与えることから、言語習得に影響を与える媒体であるといえる。

絵本と言語習得の先行研究としては、絵本読みの経験が生後3年の言語発達に影響を与えることが報告されている。ある文化や社会経済的階層では1歳前から子どもへ絵本読みを行い、絵本読みの開始の時期が早いほど、言語発達に良い影響があるという(DeBaryshe 1993, Payne et al. 1994)。また、Marjanovič-Umek, Fekonja-Peklaj, & Sočan (2017) は、1歳7カ月の子どもに親が1週間の間に本を読んであげる頻度は、親の教育歴が媒介して、2歳7カ月時点の子どもの語彙数や文法発達を予測していた。すなわち読み聞かせというインプットが多いほど、言語発達にプラスの影響が得られている。

1-5. 直示動詞「行く」「来る」の習得

「行く」「来る」については、実際には、発話者、発話時、指示時、発話点、到着点によって、どちらを用いるかが決まってくる(Fillmore 1966, 1972, 大江 1975)。加えて、相手への共感性によって、その使用を使い分ける必要性も生じる(久野 1978)。意味の面では、空間移動を示す「行く」「来る」以外にも、「春がやってくる」「時間が過ぎていく」などの時間移動を

示す「行く」「来る」も存在する。

子どもの「行く」「来る」の使用としては、「行く」の初出は1歳程度から見られる。「行く」のほうが「来る」よりも初出が早く、また「行く」の発話量のほうが「来る」の発話量よりも多いことがわかっている(綿貫 1978, 前田・前田 1996)。これには色々な要因が根底にあるが、子どもは自他のうち、自分についての言及や欲求が大きいため、自己の移動を伴う語彙が現れやすいと考えられている(Piaget 1951)。発達初期段階では、自己の移動行動を要求する「いく」「いきたい」「いこー」など、意志、願望表現である「行く」の使用が早く見られる(前田・前田 1996)が、成人母語話者と同等の使い分けができるようになるまでには時間がかかると言われている。空間移動の意味での「行く」「来る」についても小学校1年生でもまだ完全習得にはいたっていない(正高 1999, Takanashi 2019b)。英語 go, come では、9歳でも完全に習得はしていないという研究結果がある(Clark & Garnica 1974)。時間的移動やそれ以外の意味での「行く」「来る」の習得については、まだ研究自体が非常に少ない。

2. 研究の目的と研究方法

本章では、研究の目的、本研究で使用する資料および分析方法を提示する。

2-1. 研究の目的

直示動詞「行く」「来る」の習得において、成人母語話者と同等レベルまで到達するのに時間がかかるのはなぜなのか、という視点から複合的分析を進めている。先行研究からも6, 7歳でもまだ習得過程であるという結果が得られている(正高 1999, Takanashi 2019b)。その理由の一つとしては、そもそも養育者から子どもが受けるインプットの語彙の意味自体が限られていることがわかってきており、成人の言語使用では時間的移動を意味する「行く」「来る」の使用が一定数見られるが、養育者から子どもへの発話には時間的移動を意味する「行く」「来る」自体も少ないことが示唆されている(Takanashi 2015, 高梨 2019)。養育者は、子どもの日常生活に密着した語彙を用いて子どもに接し、子どもにも発達に即したものを与える。おもちゃや絵本、読み聞かせなどもこれに当たる。読み聞かせを含め、子どもが児童書に接する機会は多く、そこに現れる語彙自体が言語習得を促していると考えられる。児童書に現れる「行く」「来る」の意味が限定的で、使われていない意味が一定数あるとすれば、インプット量が少ないことが「行く」「来る」の言語習得に影響を与えていることが考えられる。

児童書と意味習得に焦点を当てた研究は管見では見られないことから、本研究は、インプット経験のひとつとして、児童書が子どもの言語発達にどのように関係しているかを紐解くため

の嚆矢となることを目指す。一般的に児童書には「行く」「来る」がどう現れて、どのような特徴が見られるのか、また先行研究で明らかになっているような言語習得の諸相と比較して、どのような関係性が見られるのかを認知言語学的枠組みから明らかにすることを目的とする。具体的には、児童書に現れる直示動詞「行く」「来る」を形式的、意味的に分析し、児童書に現れる語彙と言語習得との関係性の観点から、空間移動および時間移動を意味する「行く」「来る」、その他のメタファー表現的使用（比喩的移動）の現れについて調査、分析する。

2-2. 研究資料および分析方法

研究資料としては、青空文庫を含めた比較的一般的な6、7歳程度対象の児童書を10編選び出し、それを分析対象とした。選定基準は、(1)一定年度伝えられている一般的で著名な作品であること、(2)6、7歳へ読み聞かせされる作品であること、(3)コーパス化されている作品であることとし、10作品を分析対象とした。

その10点を、分析項目として、本動詞および補助動詞「行く」「来る」を形式の観点、意味分類の観点から区分し、分析を行った。形式は本動詞と補助動詞、その他の3分類とした。意味分類については、「行く」「来る」は、4歳辺りまではほぼ空間移動を現す表現のみが使用され、時間的移動やそれ以外の比喩的移動については、チャンク的なものが使用される程度であるという研究結果（大久保1967, Takanashi 2015）および時間の概念発達が遅く本研究資料として取り上げた児童書の中にもほとんど現れないことから、本分析では、空間移動、メタファー的時間移動、時間移動以外のメタファー的表現の3種類とした。

そして、ここで出た分析結果を基に、先行研究で明らかになっているような言語習得の諸相と比較して、どのような関係性が見られるのかを考察した。

(1) 分析資料

表1 対象図書一覧

No.	書名	作者	底本
1	ネズミの嫁入り	楠山正雄	『日本の神話と十大昔話』講談社学術文庫、講談社
2	手袋を買いに	新美南吉	『新美南吉童話集』岩波文庫、岩波書店
3	注文の多い料理店	宮沢賢治	『注文の多い料理店』新潮文庫、新潮社
4	シンデレラ	水谷まさる	『世界名作物語』少女倶楽部6月号付録、講談社
5	金のくびかざり	小野浩	『赤い鳥傑作集』新潮文庫、新潮社
6	やんちゃオートバイ	木内高音	『赤い鳥傑作集』新潮文庫、新潮社
7	かちかち山	楠山まさお	『日本の神話と十大昔話』講談社学術文庫、講談社
8	竹取物語	和田万吉	『竹取物語・今昔物語・謡曲物語』日本児童文庫、アルス
9	おやゆびひめ	柳川茂	『おやゆびひめ』永岡書店
10	蜘蛛の糸	芥川龍之介	『芥川龍之介全集2』ちくま文庫、筑摩書房

(2) 分析項目

形式面

a. 本動詞としての使用

例) 夜になったら、町まで行って、
きつと木の葉で買いに来たんだ

b. 補助動詞としての使用

例) すばやく逃げて行ってしまいます
しばらくするとまたやって来て、あいかわらずいたずらをしました

c. その他の形式⁽²⁾

例) 行き先
山まで行き着こう
もと来た道

意味面⁽³⁾

a. 空間移動としての使用

例) 天へ上っていきました

b. 時間移動としての使用

例) シンデレラはお父様と二人で暮らして来て、

c. 時間的移動以外のメタファー表現的使用

例) うまく行く

形式面としては、本動詞としての使用、補助動詞としての使用、その他の形式での使用の3通りに分類した。表記であるが、漢字使用、仮名使用とに分けて分類した。

意味面では、(2)に示したとおり、空間移動としての使用、時間移動としての使用、時間移動以外のメタファー表現的使用の3通りに分類した。

(1)で示した分析資料を、(3)の方法で、言語解析用ソフトTextos⁽⁴⁾を用いて分析した。

(3) 分析方法

1. テキストの日本語文字数を解析する。
2. テキストを語に分割する。
3. 「行く」「来る」が含まれる語を検索する。(/行.*?/)(来.*?/)⁽⁵⁾
4. 本動詞と補助動詞、その他の形式の「行く」「来る」が含まれる語を、文脈を用いて抜き出す。
5. 抜き出した語を形式的側面から分析する。
6. 抜き出した語を意味的側面：空間移動としての使用、時間移動としての使用、時間移動以外のメタファー表現的使用（比喩的使用）から分析する。

3. 分析結果

本章では、分析結果を記す。

3-1. 「行く」「来る」のテキスト別総数

資料の総文字数および「行く」「来る」の総数については、表②のとおりである。

表② 「行く」「来る」の総数

No.	書名	文字総数	「行く」総数	「来る」総数	合計
1	ネズミの嫁入り	1757	4	1	5
2	手袋を買いに	3352	12	13	25
3	注文の多い料理店	5138	7	6	13
4	シンデレラ	6476	32	20	52
5	金のくびかざり	3913	1	11	12
6	やんちゃオートバイ	5613	3	16	19
7	かちかち山	4370	23	11	34
8	竹取物語	7003	11	20	31
9	おやゆびひめ	1002	8	3	11
10	蜘蛛の糸	2024	4	5	9
	総数	40648	105	106	211

分析対象の総日本語文字数は、40648文字であった。分析対象内に使用されている「行く」の総数は105、「来る」の総数は106とほぼ同数であった。各テキストの日本語文字数では、「竹取物語」が7003字と最大で、次いで「シンデレラ」が6476字である。最小テキストは、「おやゆびひめ」で1002字であった。

「行く」「来る」の使用数であるが、テキストによって、ある程度の偏りが見られた。「行く」「来る」とともに一番多く現れていたテキストは、「シンデレラ」で52あり、次に「かちかち山」が34であった。一番少なかったテキストは「ねずみの嫁入り」で5、続いて「蜘蛛の糸」で9であった。テキスト分量、テキストの内容が「行く」「来る」の物語内での使用量に関係し、テキストが長いもの、移動を伴う内容のものが「行く」

「来る」の使用が多い傾向であった。

3-2. 形式面による分析結果

形式別に分析した結果は、表③の通りである。それぞれ、本動詞、補助動詞、表記方法として、漢字、平仮名の別に分析した。

形式面では、全体では補助動詞としての「～て来る」の使用が57と一番多かった。その次に本動詞としての「行く」が44、補助動詞としての「～て行く」が32、本動詞「来る」が29、補助動詞「～ていく」が19と続く。その他の形式での使用は、「行く」が、「行く手」、「行き届く」「行く先々」「行く先」の計4個、「来る」は、「もと来た道」「来た人」2カ所、「来ておくれ」の計4個であった。

表記面であるが、本動詞としての平仮名の使用は「竹取物語」にのみ見られたが、補助動詞では、漢字と平仮名の両方の使用が見られた。漢字表記の「来る」は本動詞が多数を占めた。補助動詞はほぼ平仮名表記がされていたが、一部、漢字表記も見られた。

次に、本動詞、補助動詞の別を表④に挙げる。

表④ 本動詞、補助動詞「行く」「来る」

本動詞 行く	50	本動詞 来る	39
補助動詞 て行く	51	補助動詞 て来る	63
その他 行く	4	その他 来る	4
合計	105		106

補助動詞としての「行く」は51、「来る」は63である。本動詞としての使用は、「行く」「来る」それぞれ50、39であったので、補助動詞としての「行く」の使用は本動詞とほぼ同じであったが、「来る」では、補助動詞としての使用のほうが多い。「来る」では、補助動詞としての使用が、本動詞としての使用の1.62倍であった。

表③ 形式別分析結果

No.	書名	本動詞 行く	本動詞 来る	本動詞 いく	本動詞 くる	補助動詞 ~て行く	補助動詞 ~て来る	補助動詞 ~ていく	補助動詞 ~てくる	その他 行く	その他 来る	合計
1	ネズミの嫁入り	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0	5
2	手袋を買いに	5	2	0	0	6	10	0	0	1	1	25
3	注文の多い料理店	3	3	0	0	4	1	0	0	0	2	13
4	シンデレラ	19	8	0	0	13	12	0	0	0	0	52
5	金のくびかざり	1	1	0	0	0	10	0	0	0	0	12
6	やんちゃオートバイ	0	3	0	0	0	13	0	0	3	0	19
7	かちかち山	7	0	0	0	6	7	10	3	0	1	34
8	竹取物語	5	10	6	10	0	0	0	0	0	0	31
9	おやゆびひめ	3	1	0	0	0	0	5	2	0	0	11
10	蜘蛛の糸	1	1	0	0	3	4	0	0	0	0	9
	総数	44	29	6	10	32	57	19	6	4	4	211

3-3. 意味面による分析結果

「行く」「来る」の使用を意味別に分析した結果は、次のとおりである。

表⑤ 意味別分析結果

No.	書名	行く			来る			合計
		空間移動	時間移動	比喩表現	空間移動	時間移動	比喩表現	
1	ネズミの嫁入り	4	0	0	1	0	0	5
2	手袋を買いに	12	0	0	13	0	0	25
3	注文の多い料理店	7	0	0	6	0	0	13
4	シンデレラ	32	0	0	19	1	0	52
5	金のくびかざり	1	0	0	11	0	0	12
6	やんちゃオートバイ	2	0	1	9	7	0	19
7	かちかち山	22	1	0	10	1	0	34
8	竹取物語	9	1	1	17	3	0	31
9	おやゆびひめ	8	0	0	3	0	0	11
10	蜘蛛の糸	3	0	1	5	0	0	9
	総数	100	2	3	94	12	0	211

「行く」「来る」の意味を空間移動としての使用、時間移動としての使用、時間移動以外のメタファー表現的使用の3タイプにそれぞれ分類した。「行く」「来る」共に、本動詞では、空間移動での使用が大部分であった。「行く」では、時間移動的使用が2、それ以外のメタファー表現的使用は3であった。「来る」では、空間移動的使用が94、時間移動的使用が12、それ以外のメタファー表現的使用は0であった。「行く」「来る」ともに、圧倒的に空間移動での使用が多い。「行く」では、95.2%が空間移動での使用、時間移動とメタファー表現的使用はそれぞれ2回と3回の使用で、割合でいえば、1.6%であった。「来る」は、空間移動での使用が88.7%、時間移動が12回で11.3%、それ以外のメタファー表現的使用は使用がなかった。

時間移動での使用には(4)~(7)のようなものが見られた。

- (4) シンデレラは、お父様と二人で暮らして来て、お母様の愛に飢えきっていました
- (5) ビリイとは、あるお屋敷の車庫の中で長い間一緒に暮らして来た
- (6) 少し慣れて来たオートバイは
- (7) だんだん甘ったれて来ました

比喩表現、すなわち時間移動以外のメタファー表現的使用は、「うまく行く」が2回使用されていた。

4. 考察

本章では、上記の分析結果を基に、児童書に現れる「行く」「来る」と先行研究で明らかになっているような言語と言語習得の諸相と比較し、どのような関係性が見られるのか考察する。

4-1. 形式的側面からの考察

まずは表記についてであるが、本動詞としての「行く」「来る」の表記は、漢字で統一されていたが、補助動詞としての「行く」「来る」の表記にはゆれが見られた。表記に関しては、当用漢字の制定によって、昭和21年の内閣告示で、代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべくかな書きにするという原則がたてられた。補助動詞の扱いはこの告示にはないが、現在では、平仮名よる表記が一般的とされる傾向にある。本稿では、主として青空文庫による資料をデータとしているので、昭和21年よりも前のものもある。また、実際には、補助動詞「行く」「来る」の表記には個人の志向によるゆれが見られるため、漢字と平仮名が混在している結果となったのだろう。しかし、著者による使い分けはされており、補助動詞に漢字のみを使用している者と、補助動詞とそれ以外の複合動詞とで表記を分けている作者とがいた。実際には、読み聞かせからのインプットが多いと考えられるため、文字表記の影響は低いと考えられる。いずれにせよ、著者は一定のルールに沿って表記しており、子どもが読んだとしても言語習得にマイナスの影響を与えることはないと考えられる。

次に、形式面での「行く」「来る」の本動詞と補助動詞の使用について見ていく。本動詞、補助動詞の使用割合は、「行く」「来る」ともに補助動詞のほうが多いという結果である。特に「来る」ではその傾向が強い。

「行く」「来る」においては、特に児童書だけに特有な言語使用をしているわけではなかった。養育者のインプットが子どもに与える影響、成人用書き言葉と、本児童書の分析結果を考察した結果、形式面では、ほぼ似たような結果であった。

先行研究による子どもの発話データの分析結果からも、本動詞よりも補助動詞の使用が多く確認されており(高梨2019)、習得の諸相と児童書によるインプットの環境的側面とに一致が見られる。

表⑥ 「行く」「来る」の発話数と初発話(高梨2019)

「行く」	母	T児	「来る」	母	T児
行く(総数)	1452	715	来る(総数)	806	293
本動詞	1225(84.4%)	628(90.2%)	本動詞	297(36.8%)	129(44.0%)
初発話	—	行く(1:7)	初発話	—	来た(2:0)
補助動詞	227(15.6%)	70(9.8%)	補助動詞	509(63.2%)	164(56.0%)
初発話	—	持っていく(2:1)	初発話	—	買ってくる(2:2)
補助動詞の意味の出現数	—	26	補助動詞の意味出現数	—	38

表⑥は、1歳から4歳までの母親と1男児(以下、T児と呼ぶ)の言語データを分析した結果である。本動詞と補助動詞の使用数を比較してみると、「行く」では、母親、T児ともに本動詞での使用が84.4%、90.2%と多く、補助動詞は15.6%、9.8%と少ない。しかし、「来る」では逆の現象が見られる。本動

詞としての使用が母親は36.8%、T児は44.0%と若干少なく、補助動詞としての使用がそれぞれ63.2%、56.0%と多かった。母親の発話、すなわちT児へのインプット量とT児の発話には関係性が見られる。

本研究で用いた児童書では、⁽⁶⁾「行く」は、本動詞が49.5%、補助動詞が50.5%であるので、高梨(2019)との関係性は低いようである。しかし、「来る」では、本動詞の使用が32.5%、補助動詞での使用が67.5%と、高梨(2019)と同様に補助動詞の方が多く使用されている傾向が見られた。言語発達には認知発達の影響もある。「行く」の結果がそれぞれ異なるのには、認知発達の側面が関係している可能性がある。こちらも今後含めて研究を進める必要がある。

松本によるコーパス分析(2017)でも、「来る」では本稿での児童書分析と近い結果が出ている。松本(2017)では「現代日本語書き言葉均衡コーパス・モニター公開版(2009年度)」をデータとしており、成人対象の書き言葉を分析対象としている。

表⑦ 書き言葉における「行く」「来る」の使用頻度

行く(総数)	195	来る(総数)	151
本動詞	119(61.0%)	本動詞	57(37.7%)
補助動詞	76(39.0%)	補助動詞	94(62.3%)

(松本 2017:257を元に筆者が作成)

表⑦のとおり、本動詞「行く」は119回で61.0%、補助動詞「ていく」は76回で39.0%の使用率であったが、本動詞「来る」は57回で37.7%、補助動詞「てくる」は94回で62.3%の使用率であった。そもそも書き言葉を含む日常的に受けるインプットは、成人であれ子どもであれ、「来る」では補助動詞によるもののほうが多いということである。実際の子どものコーパス分析とも近い値である。このことから、児童書を含む、子どもが日常的に触れる環境が、インプット情報として「行く」「来る」の使用と習得に影響を与えていると考えられよう。

4-2. 意味的側面からの考察

次に、意味的側面から考察する。3-3で示したとおり、児童書に現れる「行く」「来る」はともに空間移動での使用が圧倒的で、時間移動での使用は非常に少ない。子どもが時間の概念を身につけるのは、2歳すぎだ(Piaget 1951)と考えられており、筒井(1994)も子どもは2~3歳頃に行動的に思考できるようになり、朝起きて、顔を洗って、ごはんを食べて、遊びに行き、帰って寝るといった行動的な順序としての時間概念が身についていくと指摘する。このことから、実際の子どもの発話に、時間移動を意味する「行く」「来る」の使用は、空間移動での「行く」「来る」よりも数年遅くに現れるのは想定できる。

実際に先行研究でも、時間移動を含むメタファー表現的使用

での「行く」「来る」は初出が遅く、高梨(2019)では、3歳半までには産出が見られていない。本動詞としては「行く」「来る」ともに空間移動を意味する使用のみが現れ、「春が来る」のような時間的移動を意味する表現は現れていない。

本分析結果でも時間的移動表現は非常に少なく、それ以外のメタファー表現的使用については、「行く」で2%程度、「来る」は一例も見られなかった。これは、高梨(2019)によるコーパス分析と似たような値であった。ここで、これらを比較してみる。

コーパス分析においても子どもの発話の傾向には、インプット頻度の影響が比較的強く見られる。表⑥からも、子どもと養育者の発話には、関係性があることが明らかである。子どもと養育者である母親との発話での本動詞と補助動詞の使用数を比べると、「行く」では、本動詞での使用が多く補助動詞での使用は少ない。また「来る」では、補助動詞の使用のほうが本動詞としての使用よりも比較的多い。母親とT児との補助動詞の意味別の使用の関係性には、「ていく」は $R=0.804$ 、「てくる」は $R=0.795$ とともに強い相関があることも明らかになっている。このことから、養育者の発話が子どもへのインプット情報となり、それが子どもの言語発達に影響を与えているということがいえる。

本研究結果から、児童書においても「行く」「来る」の空間移動での使用は多いが、時間移動での使用は少ないことが示されたが、その初出を見ても、時間移動を意味する「行く」「来る」の出現は遅い(高梨2019)。具体的に見ていくと、4歳までのコーパス内での時間的移動の意味での初出は、補助動詞「咲いてくる」であった。森田(1989)の意味分析の枠組みでは、発生を意味する補助動詞で、2歳11ヵ月に初出として発話が見られた。その後、3歳9ヵ月に「(電話が)掛かってくる」、「(電話のベルが)鳴ってくる」が現れるまでは、時間的移動の意味での使用は見られていない。補助動詞「ていく」では、時間的移動を表す意味での使用はコーパス内で一度も見られず、本動詞「行く」にしても時間的移動を表す表現は使用されなかった。時間的移動やそれ以外のメタファー表現的使用は、空間移動の使用と比較して、かなり遅く使用が始まる。その理解にも時間がかかることは、空間概念、時間概念の発達と同じ傾向である。ただし、インプットが少ないという環境が習得に影響を与えているのか、そもそも子どもの概念発達が関係しているのかはここでは明らかにできない。

しかし、児童書の分析からも、時間移動での使用は「来る」が11.3%に比べ、「行く」は1.6%である。このことから、「行く」「来る」の時間的移動を意味する使用は、そもそも日常においても、養育者からも読み聞かせなどの遊びを通じて、子どもが受けるインプット頻度がかなり低いことがわかる。そもそもインプット量の全体量が少ないことが、成人母語話者と同

等の言語使用となるのに時間がかかる要因の一つであるという
ことは言えよう。

おわりに

本稿では、言語習得の観点から、児童文学 10 作品に見られる「行く」「来る」の使用について、形式的側面および意味的側面から調査、分析し、先行研究との比較から考察を行った。分析結果では、形式的側面からは、本動詞としての「行く」「来る」よりも補助動詞の「行く」「来る」のほうが多く使用されていた。特に「来る」ではその傾向が顕著に現れていた。意味的側面では、空間移動を意味する「行く」「来る」の使用が圧倒的であり、時間移動を意味する使用やそれ以外のメタファー表現的な使用は非常に少なかった。

このことから、「行く」「来る」の時間的移動を意味する使用は、そもそも日常においても、養育者からも読み聞かせなどの遊びを通じて、子どもが受けるインプット頻度がかなり低く、元々のインプット量の全体量が少ないことが原因で、成人母語話者と同等の言語使用ができるようになるには時間がかかる可能性があることが示唆された。ただし、空間概念や時間概念の発達に沿って言語発達も進むと考えられ、この点の影響も考慮する必要がある。概念発達といった認知発達の側面と、インプットといった日常的、環境的側面の影響はどちら大きいのか、この問題は本研究からは明らかにできなかった。

形式的側面については、「来る」の補助動詞の使用については、本研究での児童書分析と先行研究によるコーパス分析結果とほぼ同じであったが、「行く」については結果が異なっていた。松本 (2017) と児童書での使用とは一定程度類似していたものの、なぜ子どもと養育者間での「行く」「来る」の使用と異なるのか等、疑問が残る。また、本稿は一考察の枠を出るものではない。以上の問題点についても、今後の研究で明らかにしたい。

本研究は、直示動詞の言語習得研究の一研究として、人間がどのように空間を捉えるか、またどのような認知発達の過程を経るかといったことが絡んだ、大きな問いに基づいた研究である。児童書と言語発達との関係性を問うた研究としても新たな試みとなった。本研究を一つの足がかりとして、言語発達のメカニズム解明に向けて今後も研究を進めていく所存である。

註

- (1) 小学校 1 年生でもまだ使用に揺れが見られる (正高 1999) ということと、時間の概念習得は 7 歳までにある程度身につく (筒井 1994) ということから、6、7 歳程度の読み聞かせに使用される程度の難易度の児童書を分析対象とした。分析対象数を 10 作品としたことについては、嚆矢的な分析であることから「行く」「来る」それぞれ 100 ぐらいを目安に分析することとした。
- (2) 連用形の名詞接続のものや、本動詞としての複合動詞などは、その他の形式

に分類する。

- (3) 認知言語学におけるメタファー理論を踏襲する。ここでのメタファーは、修辭的な文飾技巧の意味ではなく、ある概念領域について述べるときに既存する概念領域を起点とし、目標領域へメタファー的に写像することを意味する。「行く」「来る」の空間概念を起点領域に、時間概念を目標領域として写像する。Lakoff & Johnson (1980) は TIME PASSING IS MOTION (時間経過は空間的移動である) という時間メタファーを提示している。
- (4) textos は言語分析用ソフトウェアである。詳細に関しては、<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/gengo/3textos/index.php> を参照していただきたい。
- (5) 平仮名の「いく」「くる」に関しては、/い*/、/くきこ*/ と入力してみたが、「いく」「くる」以外の語も拾ってしまうため、個別に確認した。
- (6) 表 4 のとおり、「行く」は本動詞 50、補助動詞 51 であるので、割合はそれぞれ 49.5%、50.5% である。「来る」は本動詞 39、補助動詞 63 であるので、割合はそれぞれ 32.5%、67.5% である。

参考文献

- ・ Clark, Eve V. & Garnica, O. (1974) Is he coming or going? On the acquisition of deictic verbs. *Journal of Verbal Learning and Verbal behavior*, 13: 5, pp. 559-572.
- ・ DeBaryshe, B. D. (1993). Joint picture book reading correlates of early oral language skill. *Journal of Child Language*, 20, pp. 455-461.
- ・ Fillmore, C. (1966) Deictic Categories in the Semantics of Come. *Foundations of Language* 2, pp. 219-227.
- ・ Fillmore, C. (1972) How to Know whether You're Coming or Going. *Descriptive and Applied Linguistics* 5, Tokyo, I. C. U., pp. 3-17.
- ・ 早瀬尚子 (2005) 「第 4 章 用法基盤モデルにおける文法知識の形成」『認知文法の新展開』研究社, pp. 75-116.
- ・ Kemmer, S. & Barlow, M. (2000) Introduction: A Usage-based Conception of language. *Usage-Based Models of Language*, In Barlow & Kemmer (Eds.), CSLI Publications, Stanford, pp. 1-64.
- ・ 久野瞳 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- ・ Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- ・ Langacker, R. W. (1988) A usage-based model. In Brygida Rudzka-Ostyn (Eds.), *Topics in cognitive linguistics*, John Benjamins, pp. 127-161.
- ・ Li, P. & Shirai, Y. (2000) *The Acquisition of Lexical and Grammatical Aspect*, Mouton de Gruyter.
- ・ 前田富禎・前田紀代子 (1996) 『幼児語彙の統合的発達の研究』武蔵野書院
- ・ 正高信男 (1999) 「認知と言語」『ことばと心の発達』第 2 巻, ミネルヴァ書房, pp. 229-257.
- ・ Marjanovič-Umek L., Fekonja-Pekelj, U., & Sočan, G. (2017). Early vocabulary, parental education, and the frequency of shared reading as predictors of toddler's vocabulary and grammar at age 2; 7: a Slovenian longitudinal CDI study. *Journal of Child Language*, 44, pp. 457-479.
- ・ 松本曜 (2017) 「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版
- ・ 森田良行 (1984) 『基礎日本語辞典』角川書店
- ・ 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究』南雲堂
- ・ 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版
- ・ Payne, A.C., Whitehurst, G.J., & Angell, A.L. (1994). The role of home literacy environment in the development of language ability in preschool children from low-income families. *Early Childhood Research Quarterly*, 9, pp. 427-440.
- ・ Piaget, J. (1951). Egocentric thought and sociocentric thought. In J. Piaget

- (Eds.), *Sociological studies*. Routledge, London, pp. 270-286.
- ・ Takanashi, M. (2015) The Acquisition of the Deictic Verbs Iku 'to Go' and Kuru 'to Come' in L1 Japanese. *ICLC13 Hand Book*.
 - ・ 高梨美穂 (2019) 「補助動詞「ていく」「てくる」の母語獲得——一男児の事例から——」『日本認知言語学会論文集 19』, pp.324-336.
 - ・ Takanashi, M. (2019a) The acquisition of the deictic verbs iku meaning 'to go' and kuru meaning 'to come' in Japanese: From the perspective of exchangeability. *Tama Art University Bulletin Paper*, 33, pp. 145-153.
 - ・ Takanashi, M. (2019b) L1 Acquisition of Japanese Deictic Verbs Iku Meaning 'to Go' and Kuru Meaning 'to Come': Focusing on Motion Event Description. *International Cognitive Linguistics Conference 15*.
 - ・ Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language*. Harvard University Press.
 - ・ 筒井健雄 (1994) 『人間形成の科学』ぶっく書店
 - ・ 綿貫徹 (1978) 「一語文から二語文へ」『教育心理学年報』第 17 集, pp. 96-97.
 - ・ Textos HP
(<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/gengo/3textos/index.php>)

分析資料

1. 楠山正雄「ネズミの嫁入り」『日本の神話と十大昔話』講談社学術文庫, 講談社
2. 新美南吉「手袋を買いに」『新美南吉童話集』岩波文庫, 岩波書店
3. 宮沢賢治「注文の多い料理店」『注文の多い料理店』新潮文庫, 新潮社
4. 水谷まさる「シンデレラ」『世界名作物語』少女倶楽部 6 月号付録, 講談社
5. 小野浩「金のくびかざり」『赤い鳥傑作集』新潮文庫, 新潮社
6. 木内高音「やんちゃオートバイ」『赤い鳥傑作集』新潮文庫, 新潮社
7. 楠山まさお「かちかち山」『日本の神話と十大昔話』講談社学術文庫, 講談社
8. 和田万吉「竹取物語」『竹取物語・今昔物語・謡曲物語』日本児童文庫
9. 柳川茂「おやゆびひめ」『おやゆびひめ』永岡書店
10. 芥川龍之介「蜘蛛の糸」『芥川龍之介全集 2』ちくま文庫, 筑摩書房